

奈女加多菓

夏井 高人

1 はじめに

セッコク (*Dendrobium moniliforme*) の自生北限の地については諸説ある。かつて、岩手県南部海岸地帯が北限とされていたものの、その後、絶滅したと考えられていた。最近になって、岩手県宮古市付近で再発見されたとの報道がある¹。しかし、2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、その宮古市付近で再発見されたセッコクがどうなってしまったのかについては報道等がない。また、震災以降の時点で、そのセッコク再発見報道の地などの植生調査を実行した結果を記録した公式記録は存在しないようだ²。このため、現時点でも岩手県にセッコクの自生があるかどうかについては、「全くわからない」と言うしかない³。

他方、宮城県でのセッコクの自生はかなり有名で、現に宮城県内の複数の場所で自生が確認されている⁴。一般には、白花を咲かせ、全体に非常に小型のものが松島セッコクの特徴とされている。ただし、瑞巖寺セッコクだけは別で、比較的大型であり、園芸品種のような豪華さをもつピンク色の花を咲かせることで知られている⁵。このように一口に宮城県のセッコクと言っても幾つかのタイプが存在するわけだが、それにしても自生があるという事実について、いろいろと考えるところがあり、特に注意して研究を重ねてきた。

ところで、『大同類聚方』には、当時、全国各地の神社等に伝えられてきた石斛の処方が収集・記録されている。『大同類聚方』という文献の成立については、らん・ゆり (ラン・ユリ部会ニュース) 435号6頁に掲載された「大同のころには御寶とも名付給ひて」で概要を述べたので、今回は、宮城県松島町と非常に近い

ところにある登米郡から上奏のあった石斛薬方について述べてみたい。

2 奈女加多薬(ナメカタ薬)

『大同類聚方』巻二「奈川介也美」の条には、石斛の処方を書いた部分は何箇所かある⁶。

「奈川介也美」は、「なつけやみ」と読み、現代の漢字では「夏気病」,「中暑」または「暑病」をあてるのが一般的なようだ。夏季に罹患しやすく、悪寒・発熱等を伴う病気のことを意味するようだ⁷。

この条には、陸奥国気仙郡の気瀬直麻呂(けせあたいまろ)から上奏され、元は同国衣館神社⁸に伝わる処方とされる「介前薬(ケセ薬)」⁹と共に陸奥国登米郡の行方之安麻呂(なめかたのやすまろ)から上奏された「奈女加多薬(ナメカタ薬)」についての記述がある¹⁰。

「奈女加多薬(ナメカタ薬)」の記述には、「南津鶏二天熱里口乾尿赤大便下者二用薬」とあり、これを意識すると、「夏気のために熱があり、口が渇き、血尿があり、下痢をする者に用いる薬」といったような意味になるだろう¹¹。

「奈女加多薬(ナメカタ薬)」の処方については、「伊波久須里五分 末加波三分 宇介羅三分 末都甫度三分 当満加川羅三分」とある。この「伊波久須里(イハクスリ)」が石斛に該当すると考えられる。「宇介羅(ウカラ)」は、キク科植物であるオケラ(*Atractylodes japonica*)のことだと推定されており、生薬名としては「朮」が該当する。「末都甫度(マツホド)」は、サルノコシカケ科の菌類であるマツホド(*Wolfiporia cocos*)のことだと推定されており、生薬名としては「茯苓」が該当する。「末加波(ミカハ)」¹²と「当満加川羅(タマカツラ)」は、よくわからない。

確実ではないが、当時の度量衡では、「分」は「両」の100分

の1を意味すると推定され、1両は37.5グラムなので、0.375グラムとなる。そこで、ナメカタ薬は、石斛5分(=1.875グラム)、オケラ、マツホドなどをそれぞれ3分(=1.125グラム)ずつ混合して処方した薬品ということになるだろう。

現在使われている生薬の処方中で、この「奈女加多薬(ナメカタ薬)」に相当するものは存在しないようだ。

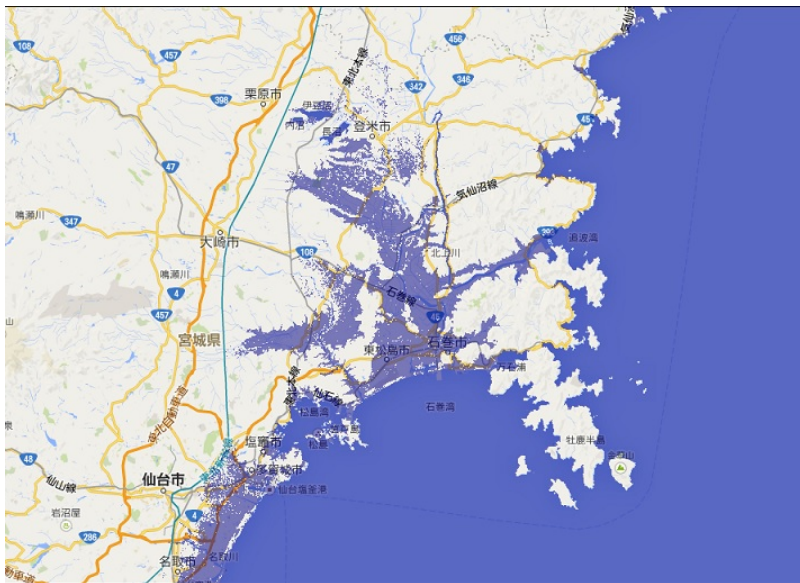
3 石斛は自生か—仮説の提示

ナメカタ薬の詳細を明らかにすることはできないが、その処方中で石斛が最も多く用いられていることには注目すべきだろうと思う。なぜなら、『大同類聚方』が編纂された当時は、現在ののような製薬会社も流通も存在せず、採取または栽培によって生薬原料を入手しなければならなかったからだ。

基本的には遺伝子解析によって系統の詳細を研究してみないとわからないことではあるけれど、一つの仮説として、①登米近辺では石斛が植栽・栽培され、神事や薬用として使用されていたこと、その後、②小氷期の到来によって海水面が徐々に低くなり、現在の景勝地松島を構成する小島が海水中から海面上に姿を現して現在のよう地形になり、更には松などの樹木が小島に生えてくるのに伴い、登米周辺に植栽された石斛から帰化・自生した石斛が徐々に現在の松島町方面にも進出し、現在の松島周辺に自生するに至ったこと、以上のようなことがあったのではないかと考えることは可能だ。

当時の海水面の状況については、専門家による精密な研究を踏まえないと確実なことは言えない。しかし、現在の地図上にある等高線に従い海拔5メートル以下の地点を塗りつぶしてみると、当時の海岸線の概要を知ることができる。そのようにして塗りつぶしてみると、登米周辺まで外洋から海路が続いていた可能性が高いことを理解することができる(現在では白鳥の飛来・越冬地

として有名な伊豆沼は、当時は、仙台湾まで続く細長い入り江につながっていて海水だった可能性が高い。)。古代における最も重要な運搬手段は海洋航海可能な大型船だったので、登米周辺に国府やそれに類する重要な国家機関を設置することは実に合理的かつ機能的なことだったといえることができるだろう。そのような場所には、当然、重要な神社や寺院等も建築され、石斛が栽培されていた可能性が出てくると考える。



海拔 5 メートル以下を海中と仮定するシミュレーション図

ちなみに、現在では宮城県内陸部にある登米郡と三陸海岸南部にある気仙郡（宮城県気仙沼市及び岩手県陸前高田市を含む地域）とは地理的に離れている（登米郡と気仙郡との間では、陸路による交通・往来は必ずしも容易ではない）。しかし、このシミュレーション図からは、古代においては、牡鹿半島の付け根部分が分断されて水路状になっていることから、外洋航海可能な船舶によって登米郡と気仙郡との間で往来可能だったと推定される。

物理的な地理的条件としては離れていても、海路によって実は

社会的に比較的近い地域だったということになる。

4 今後の研究課題

日本全国におけるセッコクの自生地を調べてみると、実は同じような関係が成立可能なところが決して少なくないことに気づく。丁寧に調査すれば、一定の相関関係のようなものを見出すことが可能なのではないだろうか。

今後、上記の仮説の検証のために更に研究を深め、その検討結果を順序公表したいと思う。もし可能であれば科学的な実証のために遺伝子解析による系統の推定までやってみたいと考えるが、予算その他の事情により遺伝子解析が無理な場合でも、文献研究だけは続けたいと思う。

[注記]

¹ 2009年7月30日付岩手日報紙によれば、「釜石植物の会の鈴木弘文会長（64）は山田町の船越半島と、宮古市の重茂半島で、いわてレッドデータブックで絶滅種となっているラン科の植物セッコクを確認した。このうち船越半島のセッコクは先月中旬、アカマツなどからなる山林の切り立った岩に5、6株着生しているのを鈴木会長が発見。先月末で終わったが、当時は白いかれんな花を咲かせていたという。重茂半島でも先月末に見つけた」とのことだ。

² 岩手県RDBには「東北地方では岩手県、宮城県、福島県でみられていたが、絶滅したようである。岩手県内ではこれまでに宮古市や山田町で発見されている」と記載されている。この記載は、

猪苗代正憲・及川邦夫『岩手の野生ラン』（岩手日報社，1996）の記述に依拠するものであり，最近の状況を反映するものではない。現実問題として，震災被災地では野生植物の植生調査どころではないのではないかと想像するから，直近の状態を知ることはいかなり困難なのではないかと思う。

³ 岩手県の三陸海岸沖付近は，寒流である親潮（千島海流）と暖流である黒潮（日本海流）とが衝突し混合する場所として知られている。そのため，岩手県宮古市以北の地域では寒い気候となり，セッコクの自生は難しいと思われる。宮古市以南の地域では暖流により比較的暖かい気候となり，内陸部よりも平均気温が相当に高くなることから，宮古市以南の海岸地帯の断崖等ではセッコクが自生可能なのだろうと思う。ただし，14世紀から19世紀にかけて北半球全体が小氷期の状態にあったので，鎌倉時代～江戸時代（幕末）ころまでは相当寒い気候に襲われていたと推定されるから，当時は，現在の岩手県に属する地域でセッコクの自生がなかった可能性が極めて高い。これと対比的に，縄文時代～古墳時代には日本全体が非常に温暖な気候であり，温暖な状態は小氷期が始まる中世のころまでは続いていたと推定されており，現に青森県にある三内丸山遺跡では暖帯～温帯の植物であるクリを栽培して食用や建材等に用いていたことが知られているから，もしかすると現在の青森県あたりまでセッコクの自生があったかもしれないと考えられる。小氷期の終了と同時に世界全体が縄文時代ころの気候に戻りつつあるので，今後，セッコクの自生地が現在よりも北上する可能性があり得るが，他方では，東南アジアや南アメリカでの非常に活発な火山活動に伴う噴煙で太陽光が遮られて気温が低下することや極地の氷河が溶けて海中に流れることにより海温が低下する可能性もあって，もしその影響のほうが強い場合には世界全体に再び小氷期が到来する可能性があることを否定できない。結局，セッコク自生地の北限は常に変動しており，一定していないと考えるのが妥当と思われる。

⁴ 宮城県松島湾内にある大小の小島には野生のセッコクが自生していることが知られていたが，濫獲，震災，松枯れ病等の影響により急激にその個体数が減少しているようだ。セッコクは，松島町の町花として指定されていることもあり，松島瑞巖寺の杉に

着生したセッコクについては、「農村加工センター 愛・らんど松島」でバイオ技術により増殖された苗が販売されている。なお、松島町のサイト上では、「セッコク（石斛）は江戸時代には名産品として伊達家の献上品に扱われ」との記載があるので、関係各方面に直接問い合わせしてみたけれども、古文献等の確たる証拠はないとの返答だった。

5 筆者が実際に栽培してみた結果、伝統的に「松島石斛」だとされてきた小型タイプのもは栽培方法を変えてもやはり小型のままであるのに対し、「瑞巖寺石斛」は肥培し加温するといくらでも大きくなることが判明した。

6 原則として、榎 佐知子『全訳精解大同類聚方[下]処方部』（平凡社、1985）の記述・校訂・解釈に基づく。

7 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』78頁

8 「介前薬（ケセ薬）」には石斛は含まれていない。なお、衣館神社とは、延喜式内三社・国史所載社・気仙総鎮守勅宣正一位氷上三社のことを指し、岩手県陸前高田市字西和野 83 番地にある氷上神社のことを意味すると理解されている。岩手県陸前高田市は、旧気仙郡に含まれている。氷上神社は、古代の山岳信仰とも関係するとされ、信仰の対象となる山（後に氷上山と命名）を構成する三峰をご神体とする神社で、衣太手神社（東御殿）、登奈孝志神社（中御殿）、理訓許段神社（西御殿）三宮を氷上三社と総称している。この三宮中の「衣太手神社（キヌタチ）神社」が『大同類聚方』巻二「奈川介也美」の条にある「衣館神社」に該当すると考えられる。「キヌタチ」の由来は不明で、アイヌ語起源説、韓語起源説などがある。単なる仮説に過ぎないが、実は案外単純な由来で、古代の秦氏と関係のある神社という意味かもしれない。

9 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』86頁

10 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』87頁

11 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』87頁は、「ナツケニテ熱（ほて）リ，口乾（キ）尿赤（ク），大便下（ル）者ニ用（フル）薬」と読み下している。

12 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』87頁は、「橘皮（キツキ）」の誤写ではないかと推定している。